

ノーベル賞を夢見て

4人のノーベル賞受賞に沸いた今年の日本。受賞者たちがかつて踏んだ基礎研究の道を今、若い科学者たち



が冬休みすら惜しんで日夜歩んでいる。夕日が沈んだ福岡市西区の九大工学部。高原淳教授の研究室で、電子顕微鏡のモニター画面に、鋭いダイヤモンドの刃が物体を切る様子が映し出された。物体の厚さはわずか100ナノメートル(1万分の1ミリ)。表面がまるでカンナのようにさらに薄く削られていく。医療やITなどの電子機器になくてはならない高分子材料をナノ単位で加工、分析するこの研究室には、高原教授を筆頭に、博士号を持つ研究員や留学生ら20〜60代の33人が所

属。世界各国がナノテクノロジー開発に力を注ぐ中、彼らもまたし烈な国際競争下にある。「新しいことが分かる」と、また次にやるべ

きことが見えてくる。時間が足りない。新しい分子を作成中の博士課程1年、天本義史さん(25)は大みそかまで大学にいて、正月を左

賀市の実家で過ごした後すぐ戻る予定だ。「世界が相手ですから。ノーベル賞? 取れたらすごいけど今は雲の上ですね」【阿部周二】

実験に没頭する研究員たち。「大みそかまで研究室で実験漬けの毎日です」—福岡市西区の九大伊都キャンパスで、金澤稔撮影

